資料－８

平成 29 年度
自己点検評価

ADACHI GAKUEN

中京学院大学附属

中京高等学校

【教学的側面全般】

１．教育の質の向上について

（１－１）ＣＨＵＫＹＯ－ＳＴＹＬＥ定着へ

授業スタイルの定着のため、全学年統一の基本姿勢を教室に掲示、定期的に確認しながら一年を過ごし、年４回のアンケートには授業姿勢の項目を何点か入れた。全体で昨年度よりも少しではあるが、良い方向へ向かっている結果がでた。３０年度には教員に対しての授業規律を運用し、生徒・教員双方から姿勢を確立させていく。

（１－２）授業の質を高めること

活発な意見が交換される場所がスキルアップに繋がると考え、公開授業週間、研究授業の実施等、オープンな授業時間帯が拡大された。また完成されたシラバスから、特に評価方法についてさらに修正がなされた。次年度以降にも評価方法を検討していく。膨大なシラバスではあるが、各教員が自身の授業でそのコース、クラスに合った内容で授業を展開していくことで教員の意識の高まりが見られ、クラス間の差をなくしていきたい。アクティブラーニングにおいては、一部で実行し研究はかさねているが、日常の授業でどのように取り入れていくのかという具体的なところまでには至っていない。来年以降のため、ポロジェクトチームを新規発足した。

全学年統一で実力テストを実施し、その結果から土曜講座を全体のレベルアップに繋げる試みを図った。土曜日が出校日となり参加率が上昇。内容については、実力テストに直結するものとしたが成果としては今一つ。通常の授業と関連させながら、研鑽させていきたい。特進層の大学合格実績も、昨年に続き良好な結果であった。習熟度別授業や放課後の講習、土曜日の模擬試験の実施と教科担当者全員での結果検討会など、様々な働きかけを続けたことで成果に繋がったと思う。中京に入ってから力を伸ばせたことが、中学校へうまく伝わっていけば入学者は増えていくと思われる。それに加え、新しい試みの継続が、新テスト対応の内容だけでなく、学力向上に繋がるものになるようにしていきたい。

（１－３）行事の内容の向上

各行事終了後のリフレクションシートの内容を精査し、どのような力を身に付けさせるかにポイントを置き、各行事を実施した。今後も行事のポイントを、まずは教員に徹底させていくことで、より充実させていくものとする。それに並行して学年、コースをまたぐケースにおいても、教務部が中心的役割を担っていきつつも、生徒も巻き込みながらというスタイルを忘れてはならない。今後も生徒、教員共々当事者意識を強く持ちながら、何らかの力を身に付けるんだという生徒の強い気持ちを応援していきたい。

２．個々の進路確定について

（２－１）キャリア教育推進

高等学校卒業後の社会を生きぬいていく力の土台を構築し、合格するまでのキャリア教育の実践が大きな意味をもつ。内外における進路説明会、進路学習から自分の適性を掴み、社会の変化に柔軟に対応していく姿をイメージできたと思う。学年・コース・担任の連携を今後も継続し、生徒一人一人に対して様々な思いを浸透させていくことが、進路決定ならびに高校三年間だけで終わらない進路指導へ繋がっていくと信ずる。

（２－２）合格と内定の確保

大学進学実績は進路指導部のみならず、学校にとっても大きな影響力があるところ。毎日の授業をはじめ、個別指導、各種試験等を積み重ねた成果。コース主任、担任、教科担

当者の綿密な討ち合わせを経ての授業に、生徒に伝わる熱い思いは成果に繋がるものである。就職においても、入社試験までの過程には日頃から社会人を意識させた動きをとり、内定後の生活指導には一層の厳しさをもってあたった。担任、関係教員の指導のありかたには充分な時間をかけての意思統一が不可欠。今後も安定した状況を継続させるため、教員間で研修を積み、活発な意見交換をおこなっていきたい。

（２－３）新テストへの対応

担当者による研修と教員全体への研修会をかさねた。これは 2020 年の新テストに対応するためだが、準備をして意識するという点で大きな意義があった。この中から教員間での研究をかさね、30 年度もそれを生徒へ享受していく。特進コースでの英会話授業が成果に繋がれば、いい流れをつくることになる。

３．生活の土台が確立した学校づくり

（３－１）生活の指針と問題行動の未然防止

昨年度までのデータと現状から、この期間はどんな啓発活動をおこなっていくのか、また各月間目標を定め、それに基づいて全体の指針としてきた。生徒指導部として全校生徒に投げかけるとき、担任から噛み砕いて話しをするとき、どちらにしても全体で統一した動きをとることによって、生徒への浸透率は高いところであり、教員の意識向上にもつながっていることは間違いない。このような目標をさだめた集中指導により問題行動抑止、ひいては日常の生活の安定につながっている。

この安定感を定着させることが大きなポイント。啓発活動、目標が的外れにならないよう、生徒の生活状況をしっかり見極めていきたい。

（３－２）非日常の生活指導

通常の授業日のほかにチャレンジウォーク、学園祭、球技大会等様々な行事がある。その動きの中で、生徒たちの日頃見えない特性が見れる時がある。それぞれを運営するにあたっての決まりごとの確認、それを実行するにあたって積極的な発言や行動を見るとそれまでのイメージが変わる。変われば要求することもレベルアップし、さらにその生徒の能力を発揮させることに繋がる。生徒、生徒指導部、行事担当部門で計画を共有することで全体のまとまりを図っていく。

（３－３）けじめある生活

精勤賞が全校生徒の半数を超えた。ここ三年間では二回目の半数超え。各授業においても時間をきちんと守る、話しをしっかり聴くという基本的な生活習慣が確立されてきた。教育相談室、保健室、生徒指導部の連携により、体調不良生徒、遅刻、早退生徒に必ず声をかけることで、状況把握し信頼関係をつくることに務めた。各クラス担任も同様の関係づくりに励み、このような結果に繋がった。

４．外活動への取り組みと成果

（５－１）強豪クラブとしての自覚と研鑽

全国制覇はじめ大舞台で多くの経験ができたことは、文武両道の高校としての力を存分に発揮できたと思う。この活躍は当該クラブのみならず、学術はじめ、全体の日常生活にも好影響を及ぼしてくれた。こうあり続ける姿をのちに入学してくる生徒たちも受け継いでくれるだろう。

（５－２）生活へ結びつく運動成果

通常の授業とクラブ活動はじめ課外活動はすべて繋がっており、どちらも怠ることはで

きないという精神が本来の姿。本校クラブの成果は素晴らしいものがあるが、それを支えているものは年間通して変わらないひたむきさが大きく影響している。周囲への感謝の気持ちを持ち続けているからこそできることで、日常生活の安定に繋がっている。大舞台での活躍は平常心から。変わらぬ気持ちで試合に臨んでいるからこそ好結果がでる、成果を出した部員に共通して見られる姿である。今後も学校全体のリーダーシップを取り続けていってほしい。

【経営的側面全般】

１．募集定員超過

（１－１）地域からの入学者増

平成 30 年度入試ではここ数年続けてきた定員確保を達成することができず､残念な結果となった。しかしながら東濃地区の中学 3 年生のうち、どれだけの生徒が入学してくれるかという『地域支持率』においては、昨年同様 10%を上回ることが出来た。さらに、昨年度は併願者までを含めて最終数値での 10%超えであったのに対して、今年度は、単願者だけで 10%超えという数値となり、最も身近な地域から、大きく支持してもらっている結果となった。大変ありがたい結果で、来年度以降の生徒募集に好影響を与えると思う。

公立高校でさえ定員確保が難しい現状があること、私学についても経費だけでなくそれぞれの特色を理解してもらえていることなどを考えると、確実に「最初に選ばれる高校」でありつづけることが大切となる。経費以上の特色をさらに理解してもらいながら、今年度は単願者での 10%をさらに超えるために、説明会等での認知や大学入試新テスト対応を契機に、特進コース中心にした生徒獲得を目指していきたい。

（１－２）特別奨学生・入試制度のありかた

少々膨れ上がっている特待生については、大きく見直しが必要。絶対数としての特待生を減少させることが必要であり、増やすことが許されるならばそれは、学業特待生のみ。言うならば、特進コースが増加することのみは「良し」と云えるかもしれない。加えて、新しい分野での特待生枠の設定も、時代に即応した流れでもある。本校が標榜する「域学連携」を入学に当たっての何らかの「評価」として使えるものにすることは、今後の生徒募集や私学経営において大きな意味を持つ。新しい側面からの中京高校への理解につながり、地域内での大きな評価につながっていくと思う。

２．内部進学状況

（２－１）前年度比増

30 年度入試における、内部進学については、以下のような結果となった。

経営：３０名　　看護：１１名　　保育：４０名　　健康栄養：１０名　　計９１名。

昨年の実績と比較して大きく数値を伸ばせたことはよかった。そんな中、看護については昨年度実績を下回り、今後の課題である。看護系への人気や注目度は決して低くない現状がある中で、本学園を選んでもらえなかった点は真摯に受け止め改善を要する。もちろん大学側の募集も常に再考を繰り返してもらう必要があるが、高校として進路指導上での導き方などについても検討の余地あり。

（２－２）内部進学会議

内部進学に関わる合同の会議や情報交換の場が何回か設定されるので、その中で円滑な

意見交換や情報交流をし、高校教員として大学における学部の流れを把握すること、また大学側として高校生の志望状況を把握するなどの相互共有が必要となる。

３．コース・クラスのあり方・カリキュラム等の適正化

（３－１）コース・クラスの見直し

２９年度だけの問題ではなくここ数年の課題でもあるが、コースやクラスによって在籍数がまちまちで、なかなか適正人数とはいかないのが現状。少人数であっても複雑なカリキュラムを取り入れている現状や、コースとして２クラスにすべきか否かといった点において、２９年度中の結論が出せず、今後の課題でもある。もちろんこれには、入試体制も絡むことであり、さらにカリキュラムのあり方なども検討事項となる。

丁度３４年度に新学習指導要領が実施されること、またよりはっきりした平常点のあり方検討など、クラスやコースと関わる部分も多く、何とか３０年度中に方向性だけでも固められるとよい。

（３－２）特進コースの入学者増

総在籍数が増加することは私学にとっての根幹であるが、本校にとっては、中でも、特進コースの増加が望まれる。他のコースでのアンバランス修正ももちろんのこと、該当する層の幅が大きい特進コースの層を少しでも本校へ向けさせたい。そのためにも新テストへの対応や英語短期海外合宿など、他校とは違う目玉となるものを前面に出しながら、生徒募集を考えたい。特進コース対象生徒にとって、選ぶ学校が多いので、ここに多くの目が向き高い評価を得られることは、学校そのものの価値もつながる。当然入学者の増減への影響は大きい。

また特進コースの増減は、地域からの評価として今までには無い部分が生まれていく。ある意味「新しい中京」のイメージ作りにもつながり、内部では生徒同士の競争力向上に伴うレベルアップ、ひいては入学者増、そして経営へと直結する。

４．退学者数の減少

（４－１）現状での卒業

１５０７名でスタートした２９年度。年度末には１４７８名で、２９名が何らかの事情で本校全日制を去っている。前年度が３１名でほぼ同数ではあるものの、割合は 1.9%と2%を切っている。わすかであるものの、この数字は今後もキープしていきたい。日々の多くの先生方による生徒との関わりが、諸々悩みもあったであろう生徒をしっかり守り通したものと考える。

全日制課程から離れていった生徒の多くが本校通信制課程へと転籍した。まったく違ったところでは無く、学園に踏みとどまってくれたことは大きい。全日で３年間を全うさせることをベースにするものの、もし離れる場合は、この傾向を今後も当然継続させなければならない。

５．通信制課程の安定化

（５－１）通信制課程充実

創立以来６年間が経過し、様々な生徒を受け入れ、また送り出してきた。それらの成果があってか、新しいサテライト施設も確実に増加した。他の高校から中京へと乗り換えてくれることは、本校の学習システムなどが認められた証である。

また新しいサテライト施設増加のお陰で、２８年度より卒業生数が増えたことは良しとしても、問題は遠方の施設利用者などへの進路指導が手薄になりがちであること。今後多くの生徒の把握と遠方の施設との情報共有を図りつつ、本校としてできうる部分を増やしていきたい。

内部進学にいくつかの数値を残せたことは、今後も確実に継続していきたい。

（５－２）サテライト施設校拡大

２９年度初めの在籍目標であった１７６名はしっかり達成することができ、３０年度を２０４名でスタートさせることができた。へいせい以外の新しいサテライト施設が増えたこともあり、より幅広い生徒を受け入れることができたことは、今後の在籍増につながっていくはず。

増加した分の施設については、常に情報交換をしながら、中京高校としての教育内容やあり方について、外れることなく確実に浸透していくようにさせなければならない。教務システムの導入などを通じた事務的な部分と同時に､精神的な面からの交流も必要となる。常に本校との連携を密にできるように体制を整えると共に、指導管理体制を整備していかなければならない。

（５－３）人事の件

２９年度まで、全日制課程の授業との兼任で、何名かの先生方を校務分掌として通信制課程業務を実施という形式をとってきたが、やはりかなり窮屈な部分が大きく、現状では諸々の業務が滞ってきた。通信制課程業務に専念できる時間を確実に確保できる体制が必要。２９年度はそれでも、通信校務者を増やして対応したものの、やはりタイトな業務であった。在籍数との絡みもあるが、３００名ほどを目安にして、人事配置と業務配置を一考する必要を感じた。

６．部活動を通じた学校活性化

（６－１）校技の活躍と実績

校技：硬式野球部の活躍は、中京高等学校にとって運動部の大きな指針でもある。何だかんだ云ってもやはり甲子園に寄せられる注目度の高さは､他の運動部とは少々違うもの。創立者が校技と指定した意味つまり、全校一丸となっていくことの尊さやそれを生徒が感じることで生徒自身に芽生える愛校心や生徒同士のコミュニケーションなどを、硬式野球部の活動を通じて体感させたい。それだけでなく、硬式の応援を通じてチアリーダー部員や吹奏楽部員が増加しており、これらの部活を意識して本校を考える中学生も現状何名かは存在する｡また単純に､これらの部活動活性化され大きな成果へと結びつくものである。

また部員自身が、この体験を通して全校の力や学校としての応援の貴重さなどを感じてくれることで、自然の内に学校の模範たる意識を自ら養ってほしいと期待する。昨年度夏春とも、惜敗の状態で出場を逃しているだけに今年こそは出場を祈念したい。

学校を代表するスポーツが大きく取り上げられることが、即、生徒増加につながるものではない。簡単なことではないが、学校の象徴としての意味合いをそこに求めるとき、やはり欠かすことのできない部活動である。

７．事務、施設部門の健全化

（７－１）施設の管理・環境美化

教職員の協力もあって、大きな経費を必要とする前に、施設改修などができたと思う。当初予定していた備品の購入や改修工事などについても実施することができ、予定通り進

められたもよう。改修は極力小額で、すべき工事は見積もりの予定通りという範囲で進捗できた。いくらかの出費を伴う分野であることは間違いないが、その施設の状況を見学して本校への入学意思を固める生徒も当然おり、生徒募集に直結する部分である。加えてそういった面があるだけに､その後の生徒の使用状況についてきちんとした指導が望まれる。本校が掲げる『５つの約束事』の実践につながることであり、先生方の指導に大いに期待したい。

（７－２）情報関連

多くの個人情報が集まり生み出されていくのが学校であることを、全教職員が再認識するよう、折に触れて注意を呼びかける必要あり。また生徒に対しても同様で、ＰＣ授業時の個人のパスワードを忘れた生徒が結構おり、注意をしたが、パスワードの意味や意義を管理部署としてのきちんと伝えながら注意を徹底したい。

ホームページ管理をする上で継続させるべきことであるが、本校のホームページの更新度合いは全国でもトップレベルだと、某大手教育企業に評されている。例え小さなニュースであってもこの動きは止めることなく継続させたい。また 29 年度後半から、スマートホンでのＨＰ掲載をよりわかりやすくという方向で、デザイン等の改革に着手した。この完成を早く進める必要があるが、こちらからの能動的かつ迅速にして多種多様なネットにおけるＰＲを通じて、本校理解を一般の方々に認識してもらいたい。

【各校務部門】

１　教務部門

（１－１）教育の質の向上に関すること

①学習の基本姿勢の徹底

「学習の基本姿勢」を全クラスにて掲示し、ＰＴＡ懇談時に生徒・保護者に資料を付して学校としての取り組みとして通達している。年４回のコミュニケーション力アンケートに授業姿勢についての項目を盛り込み、アンケートを定着度の確認と「学習の基本姿勢」の再確認の場としている。アンケートでは、各項目できなかったと答える生徒の割合は５％前後、時々できなかったと答える生徒の割合は４０％であり、昨年度よりも少しではあるが良い結果であった。本年度策定した教員に対しての授業規律である「授業に臨むにあたって」を次年度から運用し、生徒・教員の双方向から授業姿勢についてアプローチをする予定である。

②公開授業週間

年２回の公開授業週間に各教科で研究授業（授業見学）の実施および、研究授業後、教科研での授業についての意見交換が定着した。しかしながら授業に対する厳しい意見が出づらい教科もあり、意見交換を継続させる中で、授業に関する活発な意見交換がなされる風土を醸成したい。また、全体の参加率も前年よりも７ポイント上昇し後期の公開授業週間の参加率は８５％に達した。公開授業週間の目的である教師の授業力向上に向けて次年度には、すべての教科で指導案を作成した上で研究授業を実施し、計画・教材研究の段階から授業についての検討をする予定である。

③シラバスの作成

既存のシラバスの修正の年度とした。特に評価についての修正を柱としたが、ペーパー試験＋平常点（小テストや提出物）で評価を付けるという従来の方法を打破できない状況にある。次年度以降、ルーブリックを用いた平常点の評価方法を検討する予定であ

る。
④新授業形態に関する情報収集
　総合・公民科を設置しアクティブラーニングについての研究を行った。科としてどんぶり総選挙や外部講師を招いて授業を実施した。しかし、アクティブラーニングの代表的な手法の共有や、授業にどう取り込むかについて結論を出すことはできなかった。次年度以降は、新規発足するプロジェクトチームに移譲する予定である。
（１－２）教育課程管理推進に関すること
　各コースにて策定した教育課程のうち、早期に運用する必要があり、実施可能な内容を実施することについて検討した。結論は特進コースおよび体育クラスについてはＨ３０年度入学生の教育課程を変更することとした。今後、新学習指導要領に沿った教育課程を編成し、新学習指導要領実施のＨ３４年度に向けて検討を重ねていく予定である。
（１－３）学年・コースと連携した生徒への指導を展開
　授業中のトラブルについて、学年主任やコース主任が関わる度合いが増加した。今後、中堅、新人教員への指導を兼ねて、積極的に主任が指導に加わるスタイルを構築したい。また、横並びのクラスについては担任団で生徒を見守るという風土を構築した。
（１－４）生徒の学力向上に関すること
　全学年統一で実力テストを実施し、その結果が不振な生徒を土曜講座でフォローし基礎学力の向上を図っている。土曜日を出校日としたため、出席率は幾分か向上している。内容についても実力テスト事前課題を使用するなど改善を試みている。実力テストの成績推移は、平均学力は向上していると言い難い。現在土曜講座にて、低学力層のせいとへの対応に力を注いでいるが、普段の授業にて注意層以上の生徒への指導について検討する必要状況がある。
（１－５）各種教育行事・課外活動に関すること
　前年度のリフレクションシートにあった意見を反映させ、内容の充実を図っている。さらに、身に付けたい力を明確にして要項を作成した。今後より教員に対し行事の目的を強調していくことで、行事をより意味のあるものとしていく必要がある。さらに、行事が年間を通じてつながりがある、最終的にどんな力が身につくのかの見通しが分かるような行事シラバスの作成を考えている。

２　進路指導部門

（２－１）生徒一人ひとりが目指す自己実現を支援する進路指導の実践

①内部進学課創設５年目、大学・短大との連携会議、内部進学会議を開催し各種行事を実施した。

②学年・コース・担任と連携し進路説明会の実施及び進路学習を行なった。

③基礎力向上のため教務部、各コースと連携した対策を実施した。

④進路決定後の指導（進路・就職）について担任・部顧問と協力し指導した。

⑤大学入試改革に向けた対策・分析をした。

（２－２）進路状況

①国立大学合格９

帯広畜産大学、東京海洋大学、信州大学、岐阜大学、浜松医科大学、名古屋大学、香川大学、宮崎大学、鹿屋体育大学

②公立大学合格７

釧路公立大学、富山県立大学、都留文科大学、岐阜薬科大学、滋賀県立大学、広島市立大学、愛媛県立医療技術大学

③四年制大学進学２５０

④短期大学進学６０

⑤専門学校進学８７

⑥就職６９（学校推薦６７、公務員２）

３　生徒指導部門

学校運営方針に従い、『豊かなコミュニケーション能力を備えた人間性・社会性を確立させる』ことを目的に、以下の項目について、指導を展開した。

（３－１）精勤主義の推進

欠席・遅刻・早退に対する指導や時間厳守について、入室および早退許可をする際に、生徒の健康状態や表情、精神状況の把握をしながら、必ず生徒に声をかけることで、信頼関係を構築することに努めた。学年末の精勤賞対象者は各学年とも在籍の約 3 分の 1 以上の生徒が対象となり、3 年生においては、12 カ年皆勤で 10 名ほど表彰された。

（３－２）挨拶・礼儀の徹底

月間生活目標や校内放送を通じて挨拶や言葉遣い、他者への礼儀について呼びかけを実施した。また、挨拶が自然に出来るよう、登校時の校門指導や生徒会主体のグリーンキャンペーン、MS リーダーズ活動において校外で挨拶運動や清掃活動を行うなど、今後も自然と挨拶が飛び交い、他者への礼節が浸透するよう指導していく。

（３－３）感謝と奉仕の精神を高揚

ボランティア活動や募金活動などを通じて感謝や奉仕活動への意識を高めてきた。
また､他者との関わり合いや思いやりなど､対人関係についても月間生活目標に組み込み、意識を高めることに努めた。特に、ボランティア部の災害支援寄付金、各クラブの自主的な校内外の清掃活動、新聞報道で取り上げていただいた硬式野球部の人命救助など、自発的な取り組みが増えてきたので、評価を高めながら、更に推進していきたい。

（３－４）外面指導

『是は是、非は非』とし、年回 6 回の定期的な外面チェックおよび通年で生活面評価カードを活用して外面指導を徹底してきた。また、集会時等の正装日について、早めの呼びかけをしながら、正装できなかった生徒については反省文指導として、次回への意識付けを行った。他部門の教員から、『外面チェックはそろそろ必要ないのではないか』『回数を減らしても良いのではないか』とご意見をいただいたが、裏返してみれば、それだけ全体的な外面指導は落ち着いてきたと捉えることができる。引き続き、現代の教育環境も踏まえながら、校内秩序との整合性を踏まえて良い方向性を推進していきたい。

（３－５）問題行動への対応

積極的な予防的指導として、月間取り組み目標の掲示および職員会議等で各学年・担任に時期的・学年毎に頻発しそうな事案等への注意喚起、生徒への呼びかけを行ってきた。

対処的指導としては、問題行動を起こした生徒に対する特別指導において、一定の善行活動時間を設け、各指導段階に応じて校内外の清掃や学習活動を行いながら、一緒に作業し、声かけをしながら規範意識の再構築と社会性、愛校心や自己存在意義を感じた中で、『自己有用感』を築くことに努めた。問題行動件数としては、29 件（平成 28 年度：32 件）と、学校内での生徒の規範意識が安定してきたことが感じられる。

４　入試広報部門

（４－１）入学確定者数（２９年度３月末日）

コース	クラス	男子（人）	女子（人）	合計（人）
文武	ｱｶﾃﾞﾐｯｸｱｽﾘｰﾄ	９	２	１１
	体育	６６	７	７３
特進	エクシード	７	１６	２３
	プロシード	１０	１３	２３
国際	国際	４	９	１３
普通	プログレス	１３３	１３４	２６７
商業	ビジネス	３３	２１	５４
		２６２	２０２	４６４

※定員 495 に対し、-31 名。加えて単願者のみで 96.9%。

（４－２）定期的な中学校訪問

5 月より定期的な訪問を開始し、月に 1 度程度は必ず顔を出す事を心がけ実践した。基本的には必ずアポイントメントを取り訪問。見学会や入試等の案内は当然であるが、在校生の成績や生活状況、進路先等、高校入学後の変化を細かに説明することができた。また、その際は担任等から情報を収集し、一覧表形式で中学校に報告。一丸となって広報活動を展開することができた。

（４－３）東濃出身者１０パーセント獲得

この 10 年一番意識してきた数値が地元からの入学率である。目標数値を 10%とし、昨年ようやく目標を達成し 10.65%。今年度は定員を確保することができなかったが、東濃地区からは 10.34%を獲得し、2 年連続で目標を達成することができた。さらに単願者のみで見ると、昨年は 9.9%だったのに対し、今年度は 10.02%。よって単願者のみで 10%を確保でき、地元からの信頼度が上がっていると言える。この要因については、やはり口コミであったり、歩く広告塔である生徒の学校生活の充実度からであり、より一層教育内容の改革を推し進めていく必要があると考えられる。

しかしながら、今後さらに東濃地区の中学生数は減り続け、平成 32 年にはついに 3000 人を割り 2960 人、36 年には 2794 人となる。10%確保という目標から 11%に次年度は変更する。その目標を達成するため、広報ツールを再度検討し、ホームページはじめ SNS の充実を図っていく。また、入試広報部と各コースとの連携を高め、魅力を最大限に PR 出来る方法を構築していく。

公立高校の動向を見てみると、定員を確保できたのが多治見北高、土岐商高、中津高、中津商業高の 4 校のみである。よって併願を確保することは皆無に等しい状態で、今回の

入試でも 14 名である。よって今後併願者を見込むことなく、単願で東濃地区から 11%、H31 年度入試では 350 人程度を目標とする。

（４－４）見学会・説明会の推進と出願への結びつき

一番重視しなければならないのが夏季見学会であり、毎年マイナーチェンジを繰り返し実施してきた。特に今年度は「生徒主体」というテーマのもと新たなブースを設置。中学生の質問に在校生が答えるという方式で実施した。生徒にできるか不安が多くあったが、生徒間で協力し合い答えを見出したり、教員と協力し合う姿も見られ、中学生には本校の「生徒と先生の距離の近さ」を目の前で見てもらうことができた。また、前日準備は今までクラブ生に頼っていたが、今年度はスタッフに応募した一般生徒が協力。準備段階から一般の生徒が作り上げる見学会となり、在校生の達成感も見ることができた。今後も生徒主体で実践していきたい。

また、秋のコース別説明会においても代表生徒がプレゼンを実践、中学生の質問にも答えるなどの方法をとったが、こちらも好評であった。生徒主体というスタイルにブラッシュアップをかけ、本校の魅力を中学生、保護者に伝えていきたい。

そして、出願者数については、見学会との結びつきはアンケートをとって検証していくが、今年度は昨年度から比べると 100 人減であった。ますは夏季見学会に参加してもらうために、6 月の配布チラシと各中学校で行われる高校説明会での PR 方法を再検討する。

（４－５）公立高校との比較

ここ数年公立高校も定員を確保することが厳しい状況で、確保できたのは多治見北高、土岐商高、中津高、中津商業高の 4 校のみである。さらに確保のための手段として、例えば合同説明会の開催や、瑞浪高では DVD を配布するなど県のバックアップもかなり強くなってきている。その中で進学校や実業系（工業・商業・農業等）以外で公立にいかず本校を選んでくれる生徒が今年度増えた。それがプログレスの生徒数の増加で、東濃の中学生が 135 人減の中、昨年より 15 人増となった。よってプログレスの教育内容のさらなる充実を図ることで、公立との差別化を推し進めなければならない。同時に最重要課題が特進クラスの生徒確保である。恵那高、多治見高が定員を割り、さらに大学入試改革が行われ、今が最大のチャンスである。この契機を逃すことなく公立高校でできない英語教育、放課後講習、ICT 活用授業、海外研修等を今まで以上に PR していく。その際、中学校の先生方に個別に依頼して生徒を見学会に募る方向で進めていく。

（４－６）入試方法について

入試方法については、昨年度一部変更。推薦入試（特進系以外）では作文課題を 1 問増やし、挨拶について筆記させているが、入学前の事前教育的な面もあり今後も継続していきたい。また、面接については、全面接官が基本的に統一した内容で実施。温度差のない内容で行い、こちらも入学前の事前情報を得るという意味合いで有効的であった。

受験という意味では事前に中学校との連携を密にして、その生徒にあった合格を出せた。特に学業面で不安な生徒には既定の基準のみならず特別面接を課したりなど中学校の要望にも応えながら実施できた。

次年度については新たな取り組みとしてネット出願を開始する予定。県内初となり、特に中学生や中学校に迷惑をかけることになるが、丁寧な説明を心がけ実施していく。

（４－７）特待生の厳正化について

特待生徒のお陰で多くの生徒が集まってくれることは事実であるが、経営的観点から考えれば当然特待生はより絞込みをかけていかなければならない。半額支給者で数を増やすことが出来るように、また特待の条件でなくとも入学を決めてくれる教育内容の浸透など、クラブ監督の協力の下で、継続的に考慮しなければならない。

また、近年中学校で生徒会長を経験している生徒や、リーダー格として活躍した生徒、

また、地域文化の継承に尽力している生徒が多数入学している。今後そのような生徒にスポットを当てた特待制度を検討。大学も地域貢献型入試を実施しており、高校でも導入を検討。推薦で一定基準の学力がある生徒に対応したい。

５　校技・強化運動部

（５－１）校技

硬式野球部は２年連続夏の甲子園出場が懸かったが、残念ながら決勝で敗退。新チームは県大会優勝、東海大会では初戦に勝ったが、準決勝で優勝した静岡高校に敗退。春の選抜は記念大会ということで例年より１校増。出場の可能性大と予想されたが、残念な選考結果になった。出場はならなかったが、チーム内でのレギュラー争い、メンバー入り争いが激化している現在、チーム力はさらに向上すると思われ、高いレベルで夏を迎えられる。学校生活においては、１年生はどうしても中学時代それぞれが育ってきた状況があってややばらつきがあったが、日が経つにつれてスタッフの思いが浸透し、同じ方向を向きはじめ安定した。ここ４年間の入部部員数が１６４名で、退部者が０。寮生活でも特に問題はなく、選手の強い意志と、部長、監督以下スタッフの日々の地道な指導に敬服する。

（５－２）強化運動部の活躍

軟式野球部が夏の選手権大会、国体の二冠を達成。圧巻の強さをみせた。エースピッチャーと主軸バッターは当時下級生。今年のチームに残っており、全体のチーム力をアップさせ、今年も二冠を狙う。インターハイ個人で、ボクシング第３位、柔道男子５位、ソフトテニス男子第５位、選抜大会団体でソフトテニス男子第５位、個人で柔道男子２名が第５位であった。ソフトテニス男子は東海大会を制しての全国大会で期待されたが、もう一歩であった。サッカー部は全国選手権大会連続出場が期待されたが、３回戦で岐阜工業に敗戦。再起が期待される。国体では個人でレスリングで見事優勝。弓道男子は他校とのチーム編成であったが、近的で準優勝。剣道女子は第５位。クラブではないが、カヌーで第３位の成績を残した。

（５－３）強化部の見直し

体操部がなくなり、他にも全国大会には出るが上位に進出できないケースがみられ、その現状を捉え、入試広報部と連携して継続審議していかなければならない。

（５－４）部活動を通じた愛校心育成

現在夏の高校野球は準決勝、決勝戦が全校応援になっているが、今回の応援はこれまでに見たことがないほど素晴らしい一体感があった。各部員が文武コース以外のクラスにも在籍し、応援を身近に感じられることが大きい。何といってもあの場での雰囲気に乗れることは野球ならではのことと思う。

（５－５）模範生たる運動部員として

日常の生活が技術の向上につながり、試合の勝ち負けにつながっていくという認識が定着してきっており、裏表がなく明るい雰囲気の部員が多くなった。それなりの意識を持って入ってきていることに加え、各クラブのスタッフの高校生としての部分の指導が行き届いてきており、今後も教務、生徒指導と連携しながら向上させていきたい。

６　通信制課程部門

（６－１）生徒数まとめ

	新入	転入	編入	合計				
過年度生	26	56	10	92	…H29 年度当初の在籍数			
H29 年度入学	19	86	6	111	退学	除籍	卒業	年度末
合計	45	142	16	203	5	1	69	128

退学者率は 2.9%(昨年は 1.9%)

（６－２）進路状況

前期卒業生 10 名、後期卒業生 59 名の進路確定

大学 13 名（内部進学：経営 3 名）…内部進学率 23%

短大 2 名（内部進学：健康 1 名）…内部進学率 50%

専門 13 名

＊進学生徒全体 28 名中、内部進学者 4 名…内部進学率 14%

就職 10 名、社会人等 1 名

（６－３）各サポート校の教務的指導の平均化

定期的打ち合わせを実施する予定であったが、実際には年複数回に留まった。

（６－４）新たに面接指導施設の開設

豊川稲荷校・名古屋千種校を平成 30 年度より開設

７　事務部門（情報・施設・図書含）

（７-１）3 年生授業料等未納

卒業生 497 名授業料全員完納

（７-２）平成 29 年度岐阜県私立学校教育振興費補助金

￥483,209,000 獲得（昨年度　￥468,126,000）

【内訳】

一般事業分　￥413,945,000　（昨年度　￥402,039,000）

教育改革推進特別補助金(一般分)　￥25,003,000　（昨年度　￥22,317,000）

〃　(知事指定分)　￥44,261,000　（昨年度　￥37,025,000）

私立高等学校経常費補助（特定教育方法支援事業）￥6,745,000（昨年度 ￥3,412,000）

（７-３）平成 29 年度事業計画執行

① 当初計画した事業予算については予定通りに執行

・食堂テーブル・椅子新規取替　・食堂テレビ新設工事　・食堂空調新設工事

・北 2 号館空調取替工事　・整備　・校舎入口足ふきマット整備

・ネットワーク機器の更改　・特進アクティブラーニング備品整備

・ベルリッツ導入　・生徒用机椅子取替　・サッカーグランドコンテナハウス新設

・菊花寮トイレ改修工事　・龍虎寮食堂冷凍冷蔵庫設置工事

・ソフトボール場改修工事(県学校特色事業採択による)　他

② 当初計画以外の事業執行

・門塀名板取替工事　　・テニスコートプレハブ撤去

・龍虎・好文寮雨水排管改修工事　　・好文寮屋上ｵｰﾊﾞｰﾌﾛｰ管設置工事

・防犯カメラ取替工事

・他　軽微な修繕

（７−４）整理整頓・教育環境（施設・設備）美化

① 施設巡視による汚れ・破損箇所等の早期発見・早期修繕については、教職員の協力により概ねできた。修繕・改修が必要な個所については、今後事業・予算化し計画的に実施していく。

③ 廃棄物の定期的な処理、ダンボール・古紙保管場所への捨て方・整頓についての教育・指導の徹底を図ってきたが、昨年度より良好であった。

④ 施設・設備の環境美化については、昨年並みの推進状況であった。学校環境美化に関して、一部クラブ生徒に依存しているところが大きい。生徒への環境美化推進の指導の継続、教職員の整理整頓に対する意識の高揚を今後も図っていく。

（７−５）情報関連

① 情報機器・備品による教育活動・校務への支障についてはほぼなかった。

② ホームページの更新頻度については、全国でもトップレベルである。しかし、更新が

なされていないページもあるため、全体の見直しを今後かけていく。

③ ネットワーク機器の更改については計画通り進捗できた。

（７−６）図書関連

①年間読書冊数の増加に努め、図書室をはじめ図書委員、チュリ便、通信を通して読書啓蒙活動を実施した。次年度も継続した活動の実施を図る。

②図書室来室者増加のため、開館時間の工夫を図ったが微増に留まった。来年度から図書館司書の採用が予定されており、来室者の増加、読書冊数の増加に向けさらに研究工夫を施していく。